

審査の結果の要旨

氏名 朝蔭孝宏

本研究はステージ I / II 舌癌の舌部分切除術後にしばしば発生する頸部リンパ節転移の予測因子、術後頸部リンパ節転移が予測される症例の基底膜の状態、術後頸部リンパ節転移が予測される症例に対する予防的頸部郭清術の術式、舌部分切除術施行前に術後頸部リンパ節転移を予測する方法などの諸問題に対して、多くの臨床および病理学的所見を解析することで検討を加えたものであり、以下の結果を得ている。

1. ステージ I / II 舌癌の臨床病理組織学的因子を多変量解析の手法を用いて検討したところ、腫瘍の厚みが唯一術後頸部リンパ節転移の予測因子となることが明らかとなった。腫瘍の厚みが 4 mm を越える症例では術後頸部リンパ節転移を有意に多く認めた (70%)。
2. 腫瘍の厚みが 4 mm を越える症例のなかでも、腫瘍先進部の分化度が低い症例において術後頸部リンパ節転移を多く認めた。
3. ステージ I / II 舌癌における予後予測因子は明らかとはならなかった。これは、術後頸部リンパ節転移を早期発見、早期治療により救済しえたためであった。

4. 腫瘍の厚みが4 mmを越える症例では予防的頸部郭清術としては、舌癌の転移を認めることが多い、オトガイ下、顎下、上深頸、中深頸の郭清を行うsupraomohyoid neck dissectionが適切であると確認された。

5. 腫瘍の厚みが4 mmを越える症例では基底膜が破壊されている症例を多く認め（IV型コラーゲン 85%、ラミニン 82%）、転移を来しやすい状態であった。

6. 口内法での超音波検査によるステージI/II舌癌の腫瘍の厚みの計測値と病理標本上の計測値は極めてよく相関した。

以上、本論文はステージI/II舌癌における術後頸部リンパ節転移の予測因子を明らかにし、そのような症例では基底膜の破壊を認め転移を来しやすい状態にあることを明らかとした。また、口内法での超音波検査によりステージI/II舌癌の腫瘍の厚みが計測可能であることを明らかとし、術前に頸部リンパ節転移を来しやすい症例の選別を可能とし、予防的頸部郭清術を選択的に施行することを可能としたものであり、今後のステージI/II舌癌治療に大きな貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。